現役大学生の体重を巡る意識についての一考察
—学生レポートを事例として—

An Analysis of Current University Students' Consciousness of Weight
— Cases of Students' Reports —

持元江津子
Yoshimoto Etsuko

要　約

統計学を全面的または部分的に扱う講義において，教員側が提示するサンプル・データに基づくレポート課題の提出を課すことにより，受講生に，社会に生じている問題について考えるきっかけを与えうるという実感に基づく仮説が，体重を巡る学生レポートの検証を通じて実証された。

Key Words：大学生，統計学講義，サンプル・データ，レポート課題，考えるきっかけ

1．はじめに

近年，体重に関する若者の意識についてはいろいろと指摘されている。その最たるものが極端な痩せ願望である。この傾向は日本だけでなく，他の国々においても問題となっている。2006年の秋には，スペインやイタリアなどのファッションショーで痩せ過ぎのファッションモデルの出演を規制する動きがあると報じられ，さまざまな議論を呼んだ。その矢先に国際的に活躍する痩せ過ぎのモデルが拒食症で死亡するという事件も起きた。

そこで筆者は今年度，指導スタッフとして関わっている講義に必要な回帰分析を用いた統計サンプル・データを作成して行くうちに，講義を通じて現役大学生である受講生に体重に関して考えさせるきっかけを作ることができそうだと直感した。

具体的な講義名等は次の通りである。筆者が担当する聖泉大学人間学部人間心理学科における全学年対象の「統計学」と，主に１・２回生を対象とする京都大学全学共通科目「研究の世界A」(主担当,小山田耕二京都大学教授)である。前者では宿題としてレポート課題の提出を課し，回帰分析を含む分析例を文章にまとめる課題を選択肢に含めた。後者では３回分の講義時間を使って，同じ分析例を基にした研究論文作成の模擬練習を，査読と論文の修正も含めて行った。尚，分析例は，受講生が確認しやすいように，汎用ソフトであるExcelを用いて作成した。

本研究の目的は，統計学を全面的または部分的に扱う講義において，教員側が提示するサンプル・データに基づくレポート課題の提出を課すことで，受講生に，社会に生じている問題について考えるきっかけを与えうるという仮説の実証である。

2．先行研究

本研究の直接の先行研究は見当たらない。しかしながら，本研究の目的と同様の事柄を何となく実感している教師は少なくないと思われる。

体重に関する若者の意識に着眼した研究としては，滋賀医科大学看護ジャーナル掲載の「女子大学生のダイエット行動における変化ステージモデルと自己効力感との関係」(1) がある。

3．調査の方法

レポートを実施した講義名等は第１章で述べた通りである。本章では，実際に提示したサンプル・データについて紹介する。

まず日本に活動拠点を置く15～33歳（データ収集当時）の日本人または日本人と外国人のハーフを含む女性のファッションモデル30名分の体格について，インターネット上で公表されているデータを収集した。生年と身長及び体重についてのデータを集めることができた。データは，日本語版のWikipediaの「モデル一覧」(2) を通じて公開されているものを集めた。

Wikipediaの方針で，既にどこかで公開されているデータを転記しているとのことであるが，モデル自身あるいはモデル所属の事務所の意向で，必ずしも正確なデータが公開されているとは限らないという懸念は残る。とはいえ，実際にモデル活動を行っている様子を伝える彼女たちの映像及び画像から与えられる印象より，Wikipediaに掲載されているデータが実際からかけ離れた数値である可能性は低いものと判断した。

そして，収集したデータより，太っている・痩せているなどの判断基準の1つであるBMI指数を算出した。BMI指数は体重(kg)を身長(m)の2乗で除した数値である。

Table 1　ファッションモデルの体格についての基本統計量

	身長	体重	BMI指数
合計	4949.6	1386.5	509.073
平均	165.0	46.2	16.969
最大値	172	50	17.928
中央値	166	47	16.981
最小値	154.6	41	16.039
不偏分散	17.4364	7.0635	0.2609
標本分散	16.8552	6.8281	0.2522
不偏標準偏差	4.18	2.66	0.51
標本標準偏差	4.11	2.61	0.5

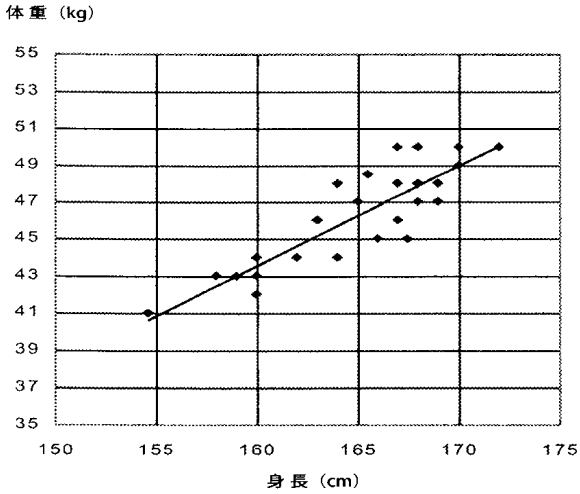

Figure 1　日本の女性ファッションモデルの身長と体重について

モデルたちのデータに関する基本統計量はTable 1の通りである。BMI指数が16から18の間に収まっていることに注目されたい。また，身長と体重の相関係数は0.8509とかなり強い正の相関が見られ，Figure 1の散布図と近似直線（回帰直線：y=0.542x-43.132）からも分かるように，モデルたちの身長と体重の関係にはかなり強く似通った傾向のあることが分かった。

次に，聖泉大学において2005年4月と2007年4月の統計学初回講義にて受講生より収集したデータを基に分析を続けた。具体的には，上記モデルのケースと対比するために女子のデータのみを取り出し，身長と体重よりBMI指数を算出した。対象となったのは33名分のデータである。さらに

このBMI指数と，女子学生より得られたアンケート調査結果の内，体重を巡る意識に関する３つの設問に関するデータについて，相関行列を算出した。Table ２と３を参照されたい。

Table 2　アンケートについて

番号	設問内容	変数	
1）	BMI基準によるダミー変数	肥満：　1	普通及び低体重：0
2）	自分が太っていると	思う：　1	思わない：　0
3）	自分より痩せている人が	うらやましい：　1	うらやましくない：　0
4）	新BMI基準によるダミー変数	18以上：　1	18未満：　0
注：肥満等の判定基準は日本肥満学会に準拠する。http://www.uemura-clinic.com/dmlecture/bmi.htm　参照。			

Table 3　相関行列

	1)	*2)*	*3)*	*4)*
1)	1			
2)	0.31943828	1		
3)	0.25877458	0.66864785	1	
4)	0.19920477	0.62360956	0.59338778	1

４）はファッションモデルの多くがBMI指数18未満であることに注目した分類である。日本肥満学会の判定基準に準拠した１）では，肥満はBMI指数25以上である。因に同学会によると，低体重は18.5未満である。

Table ３に注目しよう。１）と２）及び１）と３）の間にめだって強い相関はみられない。しかし，BMI基準による分類をモデル体型に沿って設定し直した４）のグループ分けに関連して，２）と４）及び３）と４）の間には，約0.6と質的データを含む分析にしてはかなり強い正の相関が現れる。つまり，モデルよりも太っている人たちほど（現実に太っているとは限らない）自分が太っていると感じ，且つ自分より痩せている人を羨ましく思う傾向が強そうだということである。

尚，受講生に対しては上記のごとく分析例の読み方まで提示した上で，レポートの提出を課した。提出されたレポートの中で，彼らがどのような考察をし，どのような結論に達しているのかについて，次章において述べる。

４．結果

まず聖泉大学での統計学講義において，上述の分析例に基づいたレポートは12点集まった。内訳は１回生女子３点，２回生男子５点，同女子３点，３回生女子１点である。

複数の受講生が類似の考察を述べている例として「モデル体型に似ていれ

ば自分の体型に満足しているのではないか」（女子２名），「ファッションモデルやタレントのような痩せ型の体型を，本来のあるべき姿であり，ある意味「普通」であり「平均」であると女子学生たちが思い込んでいるのではないか」（女子２名）といった指摘があった。

また，「本当は太っていないことが分かっていても，モデルと比べるとやはり太っているんだと自覚してしまうのではないか」（女子１名），「モデルと同じ服を購入して，どうしてもモデルのように着こなしたいという欲求がありそうだ」（女子１名），「ファッションモデルへの憧れが，ファッションモデルを基準視することにつながり，自分が太っているという意識に結びついている」（女子１名）という考察もなされていた。

次に京都大学での事例についてだが，提出レポートは計20点であった。提出者の所属学部について，工学部（６名）と理学部（５名，内女子１名），農学部（５名，内女子２名），医学部（男子留学生１名）といわゆる理系学部所属者が大半であり，残りは総合人間学部（２名，内女子留学生１名）と教育学部（１名）であった。文学部や法学部，経済学部といった文系学部所属者は残念ながら含まれなかった。また，１・２回生が中心であり，例外は２名にとどまった。

論文執筆の模擬練習という性格から書く内容についてある程度誘導してしまっている欠点があるが，以下に述べるような考察が目を引いた。

「やせすぎのモデルをファッションリーダーとしてもてはやしている責任はわれわれにもあるだろう」（農学部／男）という指摘や，「影響を受ける側としては，いかに自分の基準や好みが一部の人間や彼らの思惑によって決定されているかを知ることが重要である」（理学部／男）という拡張された考察，「ファッションモデルが痩せることにより、若年女性は“美とは痩せることである”という考えに縛られてしまう。」（総合人間学部／男）という指摘，「今雑誌やテレビなどで活躍しているファッションモデルたちは、そんな危険を少しも示さず，逆に健康的で理想的なイメージを出している」（農学部／女）という鋭い考察が見られた。

尚「」内は学生レポートからの純然たる引用文ばかりではなく，文意を損なわない範囲内で適宜修正及び編集を施している。次章も同様である。

5．考察

本章ではまず第一に，体重に関して持つべき意識や痩せていることの健康に及ぼす影響に関する指摘が，学生レポートにあったことに注目したい。

聖泉大学では以下のような事例がみられた。「痩せ型のファッションモデルを目にしても，自分たちは“普通”なのだと認識してほしい」（女子１名）という意見や，痩せ過ぎモデルの摂食障害による死亡事件を紹介しながら「ぽっちゃりしたモデル達がテレビに出てくる日も遠くないかもしれない」（女子１名）という希望的観測を述べるものがあった。

また，事前に特に参照記事として指定しておかなかったにもかかわらず，痩せ過ぎモデル問題報道に触れているレポートが４点あり，聖泉大学における提出総数の３分の１を占めている。これらの報道を調べた受講生はおそらくレポートにおける引用の多寡に関わらず，体重に関する意識と健康の問題に関して，いろいろと思いを巡らせたのではないかと察せられる。

次に京都大学の事例を挙げる。「ファッションモデルが“痩せすぎていない”という美しさを提起していく必要がある。」（理学部／男）という提言や，「BMI値による評価ばかりにとらわれず，体脂肪率を気にかけて内臓脂肪や皮下脂肪を減らし，筋肉量を増やせば，健康な肉体を手に入れられるとともに，基礎代謝も増すので食事制限をせずともスリムな体型を維持できるようになる。スリムな体型と健康的な身体を両立させているモデルもいる。」（理学部／男）といった科学的な知識に基づく提案，「低体重の危険性があまり知られていない問題があるのではないか」（工学部／男）という指摘，「今後は、痩せていることだけを重視する事はやめ、モデルなどに盲目的に憧憬を抱くことはやめるべきである。」（教育学部／男）という意見，「今後もファッションモデルと青少年の肥満に対する意識との関係に注目していく必要がある」（農学部／男）という問題意識を継続してもつことの必要性を主張する事例があ

った。

いずれも，課されたレポートをこなす中で，受講生が自分なりに辿り着いた結論であることが伺える。

尚，本研究で扱っている学生レポートのテーマが女子に関するデータと分析例であったため，男子学生にとっては他人事の感覚に近く，女子ほどの実感には乏しかったかもしれない。提示した分析例から何の考察も引き出されていなかったり，「多くの女性たちの“美の追求”が感じられた」（聖泉大学男子１名）というあくまで他者としての感想が述べられていたりした。

また，第二に教員側がはたと考えさせられた考察例として，聖泉大学の事例だが，「痩せ過ぎモデル批判の報道や事実を知らせる統計データなどを見せられることによって，若い女性が余計にダイエットに走ったり，かえってモデル体型を目指す女性の増加に拍車がかかっていたりしていないか心配である」といったものも男女１名ずつからなされていた。科学的なものの見方を身につけるという目的が統計学講義には含まれているため，これは意外であり残念でもあった。指導の仕方の問題もあるかもしれないので，今後の課題としたい。

その一方で，実際には太っていないのに太っていると思い込む若い女性像を示す分析例に接してみて，「統計というのは誤った認識を確認するのによい学問だと感じた」（聖泉大学女子１名）という非常に好意的な感想を述べる例もあり，大いに勇気づけられた。

６．結論

以上より，本研究を通じて述べてきたように，統計学を全面的または部分的に扱う講義を通じて，社会に生じている様々な問題について若者たちに考えさせるきっかけを与えうることが実証された。

確かに，すべての講義において，その講義ごとに新しい知識やスキル，ものの見方，判断力，応用能力などを受講生に身につけさせるという目的がまずある。しかし，その講義の本来の目的を活用しながら，社会で起きている

何らかの問題について考えるきっかけを与えるという副産物にも配慮しつつ講義を進めて行くことも時には大事ではないか。それはより幅広い応用能力を受講生に身に付けさせることにつながりうるのではないか。筆者は本研究をまとめる中でそのような手応えを強く感じた。今後も講義の本来の目的を逸脱しない範囲で，副産物を生み出す講義にチャレンジしてゆきたい。

参照文献

（1）中村，任，生田，須田，安江，「女子大学生のダイエット行動における変化ステージモデルと自己効力感との関係」，『滋賀医科大学看護学ジャーナル』，3（1）,pp.64-69，2005年。

（2）http://ja.wikipedia.org/wiki/ モデル一覧，情報取得日2007年 4 月20-21日。

（3）内田治，『すぐわかる EXCEL による多変量解析　第２版』，東京図書，2000年。